

2006年4月26日、私達はウクライナにいた。生き残りの事故処理業者らが行進する中、20年目の祈念式典は大勢の市民が参列して行われた。亡くなった者たちのためにも、また今後も病気の苦しみと闘い、あるいは汚染の中で暮らすしかない人々の為にも、事故の記憶を風化させてはならない。

### ● 20年目の春は巡り来ても・・・

森で木々が芽を吹き、白や黄色の一輪草の花で下草が絨毯のように美しい新緑のウクライナ。おそらく20年前の4月26日も同じであったろう。タンポポを摘む子供達の上に放射能が襲い掛かっていることも知らずに母親達はおしゃべりをしていたに違いない。その頃、数10キロ先の原発では、燃え盛る炎と格闘する消防士や原発作業員らが次々と倒れて病院に運ばれていた。三日間だけの着替えを持ってバスに乗せられた住民らが、あの時永遠に故郷を失ったのだと知るのは大分後になってからである。事故当日を想像すればこんなところだろう。

今回、20年目の春を迎えた汚染地ナロジチを訪問した。チェルノブイリ原発から南西約70Kmのこの町の若葉の美しい街路樹の通りは相変わらず人影も疎らだ。全ての住民が移住すべきこの町には、今なお10000人を超える人々が暮らしているというのに、畑で働く人々の姿もなく、町の寂しさは10年前も今も変わらない。産業が崩壊し、ソ連崩壊と経済破綻で移住政策が頓挫したのち、人々はここで生き続けることを余儀なくされた。それは失業による貧困と被曝による病気との戦いの始まりでもあった。ナロジチはウクライナでも最もガンや結核など感染症の多い町である。子どもたちの7~8割は何らかの病気に罹っている、という。この地域病院の医薬品の60%は私たちの支援でまかなわれている。

### ● 始まったナロジチ支援

それでも人々はここで暮らし、子どもたちは学校に通っている。今回訪問したポロトヌイツァ村の学校では全校生徒36名が私たちを迎えてくれた。

昨年訪れた代表団の働きかけで、この村の壊れた水道設備が復旧したばかりだ。道路脇の給水栓からほとばしる水は冷たく美味しかった。3月に中部よつば会の呼びかけで行われた「チェルノブイリ20周年救援バザー」の売上金は、別の村の水道復旧に使われる。安全な水の供給は人々に少なからぬ安心をもたらすに違いない。最近、ナロジチ地域病院に私たちの数年来の願いだったレントゲン装置が導入された。今後、病気の早期発見や診断に威力を発揮するだろう。これは私たちの希望をかなえてくれた日本大使館の「草の根無償支援」による。今年中には、ナロジチ地区の21の村の診療所に基本的な医療機器を整備する計画も進んでいる。こうして、ナロジチ地区で暮らす人々を支援する試みがすでに始まっている。この支援をさらに強化し、被曝と貧困との戦い、というより困難なしかしより本質的な取り組みに私たちは踏み出そうとしている。

### ● ナロジチ・菜の花プロジェクト

汚染は一樣ではない。ナロジチ地区には37キロベクレル/m<sup>2</sup> (kBq/m<sup>2</sup>) 以下の、いわゆる非汚染地域が2300ヘクタール (ha) ある。しかし、残りの約12万haは汚染地域である。この中の比較的汚染の少ない場所でナタネを栽培し、セシウム137を吸収して土壌を浄化し非汚染地域を拡大する、という新たな取り組みが「ナロジチ菜の花プロジェクト (仮称)」である。ナタネ油は安全なバイオジーゼル油 (BDF) に転換して農業機械の燃料に当てる。菜種による土壌浄化の研究は、近年数多く行われているが実地に試された例はほとんどない。次回からこの計画について詳しく述べる。(河田)